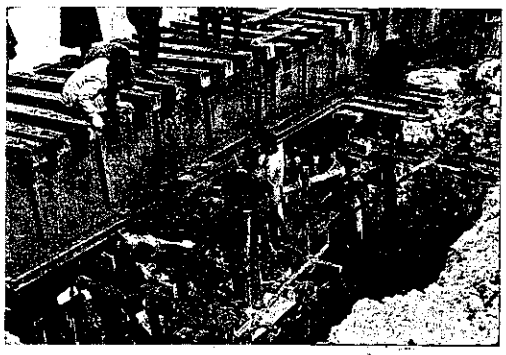
挿入して鈑桁を受けさせるのは早急を要する応急工事としては手數がかゝり過ぎるので，復舊工事で手戻りとは考へたが，止むなく斯くしたのである。

そこで橋脚の左右に更に 2 基のステージングを作り，其の間に径間 30 呎の鈑桁を横に架渡し，応急工事に用ひたステージングは撤去し，其の鉄桁と富山寄りのステージングとの間に軌條桁を挿入して上部鈑桁（支間 9.8 m）2 連を假受して橋脚補強根固めを施工したのである。

図-11. 軌條桁挿入作業



(昭 11. 3. 20 撮影)

5. 結　尾

一瞬の雪崩は重量約 150 t の橋脚を基礎底部より傾斜せしめたのである。その力は 35 t 以上と推定せられ，之に抵抗せしめる強さを橋脚に與へる樣復舊せねばならぬ。橋脚基礎は充分根固補強し，鈑桁のアンカーボルトも充分確實に植換へる事とした。

然して一方雪崩を再び發生せしめざる樣頽雪の源に頽雪止擁壁及び軌條柵を設置し，尙防雪林 90 000 m² を新設すべく計畫中である。

以上に要した工費は応急工事費 1 750 円，復舊工事費 3 300 円，計 5 050 円である。

國際材料試驗協會記事

會員 工学士 近藤泰夫*
工学博士 西原利夫**

1935 年 12 月第 11 回常設委員會議事

I. 開會に當り委員會議長伊代表 G. Forte 氏は本協會が多年困苦せし經濟的事情が著しく是正せらるゝに到れるを述べ關係各國の厚意を謝し今後の協力を要望せり。

II. 幹事長は本協會經濟狀態に關し收支及財産の數字を說明し既に協會負債の大部は返濟を了したるも尙會員會費及各國寄附金を仰ぎて之に充當せんことを要望し之に對し委員會は次の決議をなせり（數表及決議略）。

III. 第 2 回總會が 1937 年開催せらるゝ見込を以て本協會事業に關する決議をなせり。

IV. 次回總會の場所及日取に關する件　英代表 Dr. H. J. Gough は第 2 回總會を英國に於て開催すべき準備ある旨を述べたるに對し委員會は次の決議をなせり。

(1) 第 2 回總會は London に於て 1937 年 4, 5 兩月の間に開催すべく英國より招待狀を發送せられたし，

(2) Dr. W. Rosenhain の死後缺員の儘となれる本協會々長は英國に於ける知名の權威者を推戴することゝし其の人選は Dr. H. J. Gough に一任す。

Dr. H. J. Gough は 1937 年開催のロンドン總會の計畫及組織を定め常設委員會に報告せられたし。

---

* 京都帝國大学教授
** 京都帝國大学教授

(3) 次回總會迄に於ける事業は III 記載の決議に依るものとす。

ロンドン總會に於てそれ以後の本協會の組織及事業に關する各國の新提案（佛，和，伊，瑞典，チェコスロバキヤ提出）につき審議すべく同總會以後に於て實施せらるべし。

ロンドン總會に關しては各國に於て關係学會，機關雜誌其他の手段を經て有力なる宣傳を爲されんことを希望す。

V. (1) Prof. P. Goerens より 1935 年 3 月 6 日附書信によれば故 Prof. R. Otzen の後継として Prof. G. Fiek, Berlin-Dahlem が "Uniformity of Gauging Testing Apparatus" 調査委員會の委員長たることを承諾せられたり。

(2) 獨逸支部より Dr. Kühnel, Reichsbahnoberrat が "Terminology of Mechanical Properties" 調査委員會の委員に任命せられたり——委員長 Prof. H. Rabozée。

(3) Prof. C. Benedicks, Stockholm 及 Dr. Barta, Prag 兩氏の努力に拘らず未だ露國權威者と接觸することを得ず，從て協會內に蘇聯支部を建設するに到らず，F. Cellerier 氏も同樣目的を以て目下巴里滯在中の露國權威者と會見せらるゝ筈なり。

(4) 本協會組織変更に關する提案はロンドン總會の直前又は會期中迄其審議を延期す。

(5) F. Cellerier 氏は次の問題に關し委員會の意見を求めたり，即ち本協會に於て C 分科會（有機材料），D 分科會（一般問題）の存在に對する疑義は無かるべきも A 分科會（金屬材料），B 分科會（無機材料）に關しては關係せる他の協會の既存せるものあるにより（例へば國際橋梁構造協會，國際鑄物協會の如き）之を考慮するときは茲に疑義を生ぜずや。

之に對し常設委員會の意見は本協會の目的は單に材料試驗に關する範圍に於て國際協力を求むるものなるに反し他の協會は其構造，經濟，經驗等に關する問題を取扱ふものなり，且つ本協會は國際協會中に於て最も長き歷史を有す。

本協會が他協會と範圍を定めて協力すべき方法に關してはロンドン總會に於て審議せらるべし。

(6) Dr. H. J. Gough は米國と更に一層密接なる關係を保つべく努力すべき旨を述べられたり。

(7) Prof. M. Rös は 1937 年のロンドン總會に對する準備を爲すため直ちに A-D 委員長を召集すべき旨述べたり。